

アルバート・ジョンソンへ宛てたコウトクの手紙
(つづき)

(1911年11月号)

1907年5月28日 トウキョウ

親愛な同志・友人

私は2週間前、海浜の保養地から帰ってきました。私の身体は漸次よくなっています。ヘイミン新聞事件は確定しました。発行人と編集人は私の談話を発行した科で入獄を宣告されました。

しかし発言者の私は無罪なのです。大変幸運ではあるが奇妙です。

日刊紙が発禁にあって、われ等には機関紙がありません。数人の同志は週刊誌の発刊を始めましたが、彼等は議会主義者ですから、多くのことは期待できません。

私の母が郷里から来て、同居しています。年は67才です。

思うに貴方は最愛の孫娘さんと貴方にとってなつかしいサンフランシスコにいるのですから今が大変幸福でしょう。彼女の写真を私に送って下さい。貴方の孫娘、アリスさんには後程、贈物をします。それには彼女の好みの日本の品物を送りましょう。彼女は日本の品の何が欲しいかお知らせ下さい。貴方の両眼は如何です。健康であられるよう希望致します。

D. コウトク
〔訳註〕※1907年6月2日発刊、片山潜派の「社会新聞」のこと。

~~~~~  
1907年8月16日 トウキョウ

親愛な同志

7月23日付の手紙と多くの絵葉書類は落手しました。大いに嬉しかったが、

殊に貴方の孫娘さんの写真は楽しく、現在私の書齋に飾ってあります。

妻はアリス嬢の贈物にモスリンの着物を縫いました。それを今日私が郵便小包にして発送しました。この手紙の後、数日すると受取られることでしょう。一つ言っておきますが、あの着物はモスリンです。絹の着物は買えなかった。非常に高価ですし関税も高いのではないかと思いました。ですが生地は至極いいものです。アリス嬢が好きになって呉れるかどうか聞きたいものです。

こちらの気候は非常に暑く雨が多い。けれど私の健康は急速によくなっています。最近の2週間は、社会主義者の夏期学校、(これはユニバーサリストの教会でした)でアナキストの道徳について講義しました。ご家族の皆さんと同志達によろしくお伝え下さい。

早々

D. コウトク

---

11月14日 日本

親愛な同志

10月8日付貴方の手紙とカードを受取りました。エブリボディ誌にはお礼を申し上げます。この雑誌の中のロシア嬢の話は大変面白うございました。

敬具

D. コウトク

\*マリースピリットノヴァの事(H・ハーヴェル註)

---

1907年12月6日 日本

親愛な友・同志

約1ヶ月の旅の後、わが家へ帰ってきて、貴方が送って下さった石コウ

像 をみつけました。これはトウキョウの郵便局から既に転送されていたのです。

私の家族や郷里の村人達が、太洋の彼方の土地から来たこの珍しい品物を、  
どんなに喜んだか言うに及びますまい。私もまた、特に無傷で受取ったことを喜  
んでいます。ただ肩の部分が折れ、小さいカケラがありました。これはすぐ糊  
付けしました。

実際、これは私にとって貴重な記念品であり、私の書斎の最愛の飾りです。何  
故なら私の友人の高貴な思想とやさしい心がいつもそこに認められるからです。  
そして私の心は絶えず勇気づけられ、生気を吹きこまれ、慰められるのです。貴  
方の親切な贈物に対する私の深甚な謝意をお受取り下さい。

私の 胃 腸 症 はまだすっかりよくなってはいません。妻  
は長い間神経痛に悩んでいます。しかし私の郷里の暖い気候と静かな田園生活が  
私共の健康をすすめるよう望んでいます。私は来年の夏までここに滞在します。  
トウキョウは冬と春は非常に寒い。

※  
日本の社会主義者運動は遂に二分裂しました。——即ち社会・民主党とアナー  
キスト・コミュニストです。これは各国でよく知られた極く自然な進展です。  
日本は既に社会民主党とアナーキスト・コミュニストを産みだしたのですから、  
これからは多くの、非常に多くの直接行動主義者、反軍国主義者、ゼネスト主義  
者、テロリストさえ生みだすでしょう。

貴方のお嬢さんと孫娘さんによろしくお伝え下さい。健康を祈ります。

敬 具

D. コウトク

追 伸 カトウ博士、若いカトウの父は現在ドイツにいます。彼はステイトガル  
トでの国際社会主義者会議に、日本社会主義者の代表として出席している。彼は  
社会・民主党、むしろ社会改良家です。息子の方のカトウはハンブルグにいます。  
彼はいつも私に文通しています。

サカイは執筆と翻訳で生計をたてている。娘のマガラは父と住んでいます。彼女は4才だが至極利こうです。

※訳註、1907年2月17日日本社会党第2回大会における分派論争をさす。

◇

◇

◇

1908年2月3日 日本

親愛な旧き友・同志

1月10日付貴信落手。両眼が未だよくないと聞きお気の毒です。全く眼の治療は高価ですね。医学の進歩・発展は金持以外民衆には何の恩恵ももたらしません。現在のところ、医療と医師は持てる者の階級を治療するためにだけあるようなものです。

サカイ、オオスギの両同志及びその他4名がトウキョウで、1月17日（金曜日）に逮捕された知らせには驚かれるでしょう。私もそこへ居合わせたら捕ったことでしょう。

昨夏、われ等は「キンヨウ会」（意味は金曜日の会）を組織して、毎週金曜日に会合することになりました。すぐ警察が介入してきて、会合は何の釈明もなくすぐ解散させられたのである。1月17日の夕方、会合は解散させられ、出席者はすべて散会しました。だがそこに居残った数名の同志達が、野外で別の会合を開こうとしたので警官は圧力を加え、同志達が抗議して争いになったのです。灯は消えました。みなは暗いホールで争った。その時同志オオスギが家屋の屋根の上に上り、街路の民衆に向かって立派な演説をしました。また他の数名は警官の暴力を攻撃したのです。警官はオオスギを引きずり降ろし、別の同志が彼に代りました。その結果6名の同志が約30名の警官に無理矢理、警察署へ連行されたのである。群衆は彼等の逮捕をせ止しようと争ったが駄目でした。

彼等はすぐ「公安条令」を破った罪科で告発され、現在裁判を受けています。

ブレード誌を受取りました。感謝します。時間ができれば、日本の戦闘的人び

との信念をブレード誌に直接、投稿しましょう。同志達が逮捕されたので私は今、多忙です。

サカイの住所は次の通り。

トシヒコ・サカイ

トウキョウ刑務所

イチガヤ、トウキョウ

眼がよくなったら、彼に手紙を書いてやって下さい。しかし政治や社会問題に  
触れてはいけません。さような手紙は検閲されます。 早々

D. コウトク

私と妻の健康は徐々に快方に向っています。

〔訳註〕事件は 1月17日平民書房での演説会中止解散によるものを指す。

~~~~~

1908年7月7日 日本

親愛な同志・友人

長い間手紙を書かずこれ迄放置していたことをお許し下さい。眼の工合は如何
です？ よくなることを希望致します。

トウキョウではアナーキストの徹底的逮捕があったと知れば驚かれることでし
ょう。

“アナキー”または“アナーキスト・コミュニズム”と大書した2、3本
の旗をかついで市を練り歩き、15～20名の同志達が、その旗を押収しようと
した60名の警官と衝突しました。激しい闘争の後、14名が逮捕され、投獄さ
れたのです。その中に同志オオスギと4名の若い女がいます。彼等は最も野蛮な
処置を受けていると言われ、面会とか文通は禁止されている。そこでどんな状態
にいるのか判らないのです。われ等は彼等が出廷するのを待っているだけです。

私は2週間すればトウキョウへ発ちます。母と妻はもう少し居残るでしょう。
貴方の手紙は以前と同じ住所宛にして下さい。転送されますから。

眼に気をつけて下さい。

早々

D.コウトク

〔訳註〕事件は6月22日の赤旗事件を指す。

◇ ◇ ◇

1908年8月19日、トウキョウ

親愛な同志

新機関誌の発行を準備するため、再びトウキョウへ帰ってきました。私の健康はよくなっています。同志サカイと13名の男女は刑務所に入っています。眼は如何ですか。お便りを心待ちしています。

敬具

D.コウトク

◇ ◇ ◇

*

1910年4月11日 日本

親愛な旧友・同志

私は政治的迫害と財政的困窮のため、トウキョウから約70マイル離れたサガミノ国、ユガワラの海浜に退去を余儀なくされています。トウキョウに居た頃は、警官達がいつも私を尾行していました。私のすべての事業と運動は彼等の非合法で卑劣な介入を受け、私は生活の資を得ることができなくなりました。

ここへは3週間前に来たのです。私は一冊の本を書いています、その中でキリストは存在せず神話に過ぎないこと。またキリスト教の起源は異教の神話に認められること。更に聖書は欺まんなことに言及します。これを書く上で、貴方が送って下さったラド氏とA.ベサント氏の本に多くを負いました。

沢山な日刊紙を受取りましたが、その中で大きなストライキの詳細が掲載され

て居り、またファイアブランド誌の1冊もありました。ご厚意を感謝します。ファイアブランド誌は非常に良い雑誌だと思います。

* *

カンノ嬢が同居しています。彼女の兄の手紙は数日前に受取りました。彼は現在ロサンゼルスに居ます。いい若者ですがクリスチャンで反社会主義者です。ここには2ヶ月滞在します。

敬 具

D. コウトク



* アルバート・ジョンソンへ宛てたコウトクの最後の手紙。

* * スガノ・カンノは彼が政治上の差異のため妻チヨと別れた後の友人。

チヨ・コウトク夫人は夫のアナーキストの信条を受入れなかった。彼女は議会主義社会主義者として終始したのである。(H・ハーヴェル註)

{ ノート }

大地 (Mother Earth)

エマ・ゴールドマン主宰の月刊小冊子の誌名。彼女は1906年3月、250ドルの資金で本誌を発刊。誌名の由来については次のように語っている。

「それは2月の初めでした。でも空気は既に春の香りがたちこめていました。土地は冬の捕われから自由になりかけていました。緑の僅かな地面も現われ、大地の深みに芽ぐみ始めた生命を示しています。『大地』それが私の子供の名前だ。人間の保有者、自由な地へ人は自由にさまたげられることなくすすんで行く。私の耳には古く忘れられた繰返しの言葉のようにこれが鳴りひびきました。」

創刊号は64頁で、彼女は「女性解放の悲劇」を執筆。アナーキズムの主張、

意見、更に文芸紹介記事等を掲載。主な執筆者：ヴォルタリン・ド・クレイル、テオドル・シュロエダー、ボルトン・ホール、ヒッポリート・ハヴエル、レオノールド・アボット、サダキチ・ハルトマン、アルビン・サンボーン、アレキサンダー・ベルクマン等であった。傾向は人生と芸術を反抗の双生の炎と考へ、アナキズムがドグマであると共に自由解放の理想であることを主張した。この為、アナキストだけでなく自由な一般人の支持を受け、1908年～1915年に亘り、ベルクマンが編集を受持った頃は発行部数3,500～10,000部になったと言う。本誌は12年間継続発行された。

エマ・ゴールドマン

1869年6月27日、ユダヤ系ロシア人として出生。幼少よりロシアにおけるユダヤ人迫害に遭い、革命前夜の社会状況で成長した。彼女を精神的に鍛えたのはニヒリスト達で、ツァーに対する反抗、少数民族、被抑圧者への同情が基調になっている。1889年8月、米国へ渡り、後に家族全員で移住した。ニューヨークではアレキサンダー・ベルクマンと知合い、またドイツ人、ヨハナサン・モストに師事する。1892年、彼女は既にアナキストの女闘士として、ベルクマンと組み、カーネギー鉄鋼会社の支配人フリック襲撃に参加。1895年英国でクロボトキン、マラテスターと知己になる。1901年マッキンレー大統領が銃撃され死亡。その犯人の影の指示者とみなされ官憲の迫害に遭う。

1906年「大地」誌を発行。以来この機関誌によって言論の自由、徴兵廃止、産児制限、ロシア革命の裏切り等を主題として、アナキズム運動を展開する。

1910年エマ・ゴールドマンが幸徳事件に接した時期は、国内ではロサンゼルスでタイム社の社屋爆破事件が起き、これは労働者の組合運動に対する反動的な新聞社への怒りが爆発した結果なのだが、アナキストの仕業とされた。エマ

はアナキズムの立場から論陣を張る必要に迫られていた。またスペインでは近代学校の創設者、フランシスコ・フェラーの処刑があり、「大地」誌ではこの事件と幸徳事件を等しく、官憲のアナキストに対する迫害として把握し、アナキスト運動の高揚に資している。

この小冊子に収めた本文と重なるようであるが、彼女の自伝(Living my Life)から関係記事を抜萃する。

「同時に(タイムス社の社屋爆発事件を指す。訳註)日本からミカドの生命をねらったと言う計画によって、数多くのアナキスト逮捕のニュースがとどきました。そのグループの知名人はデンジロウ・コウトクでした。彼は自国では、日本をバラ色に描いた西欧の作家達、ラフカディオ・ハーン、ピエル・ロッチェイ、マダム・ゴーチェよりも有名でした。コウトクは自分で、労働者が使役される野蛮な政治体制の下で、その悲惨な状況を体験したのです。長年、彼はこの状況に対処するよう日本のインテリゲンチヤと大衆の眼覚めのために自己を捧げていました。彼は明敏な心の人で、有能な作家、またカール・マルクス、レオ・トルストイ、ピーター・クロボトキンの著作の翻訳者でした。リエン・スー・ソー、ホーチン夫人と協力して、彼はトウキョウ大学で日本人、中国人学生の間アナキズムを宣伝しました。政府は繰返し彼をその活動の故に投獄しましたが、わが同志の情熱をそぐことはできません。最後に当局は、天皇に対する計画の中に彼を巻きこみ“除去”しようとしたのです。

11月10日A.F通信は「ミカドの生命に対する計画者達を吟味する特別法廷を任命し、26名が有罪とされ、その中に首謀者コウトクと彼の妻サガノ・カンノが含まれている。同法廷は73条による厳罰を勧告し、これによれば、皇族に対する反逆罪は死刑を規定している」と報導しました。

日本での執行者の手をとどめるのに何かをしなければならないとすれば一刻の猶予もありませんでした。私は言論自由連盟の会長、D・アボットの手を借り、

反対を提起し、これが間もなく全国的規模になったのです。送られてきた手紙、電報類をワシントン在の日本大使、ニューヨークの領事、米国の諸新聞に廻送しました。公的生活で知名な人びとの委員会が、米国における日本代表達と会見しました。米国の大きな反対は、ミカドの総督共の気に入らないのは明瞭でした。彼等は有罪者達の性格を黒く塗りつぶそうとやっきになり、われわれの委員会が尽力をやめるよう懸命の努力をしていました。これに答えて私達の仕事は、私的なまた公的な会合をもち、新聞社を攻撃し、他方では日本で行なわれている合法的犯罪に喚起するよう熱心に努めたのです。

このキャンペーンに参加した多くの友人の中にサダキチ・ハルトマンがいました。彼は詩人、作家、画家でまたホイットマンとポーの詩や物語を数多く読んでいました。私が彼に初めて逢ったのは1894年です。以後の彼はわれわれの雑誌(大地)のきまった寄稿者になっていました。日本人の混血である彼は日本の状態とコウトク事件に親しく、私達の要請によって強力な宣言文を起草し、これを有罪になった同志達の為に広く配布したのです。」

「デトロイトで(エマの遊説先・訳註)日本の同志達の処刑のいやなニュースを受取りました。デンジロウ・コウトクと彼の妻スガノ・カンノ、米国で教育を受けた医師、S・オオイン博士、農業技師、A・モリチキ(森近運平の事か・訳註)とその協力者達が合法的に暗殺されたのです。彼等の犯罪は、わがシカゴの犠牲者達と同じく、同胞を愛し、理想に貢献したことでした。

「アナーキ万才！」デンジロウ・コウトクは最後の息と共に叫びました。

「バンザイ(永遠に)」と彼の仲間達が死において唱和しました。『わたしは自由のために生き、自由のために死ぬのです。何故なら自由がわたしの生命でした。』スガノ・カンノは叫びました。東洋と西洋が、血の同じきずなに結ばれたのです。」

幸徳関係の叙述は以上で終っている。

1940年5月14日エマ・ゴールドマンは71才で生涯を終った。

アレキサンダー・ベルクマン

1870年11月ロシアのヴィルノに生まれた。幼少の頃、彼の伯父マキシムがその革命活動のためシベリア流刑になり、これ以後、ベルクマンは革命文学を通じて革命家に成長する。1888年米国へ移住。1892年エマ・ゴールドマンの協力を得て、当時製鋼労働者を圧迫していたカーネギー鉄鋼会社の支配人フリックを襲撃し傷を負わせ、22年の懲役刑を受ける。出獄してからは終生エマ・ゴールドマンの同志として「大地」誌の編集を助け、1919年彼女と共にロシアへ渡航、ロシア革命の裏切りに幻滅し、「ボルシェビッキの神話」を発表する。なおヨーロッパ各地では、いずれも滞在について迫害を受け、スペイン革命の前夜、1936年6月28日病身のためピストル自身を遂げた。彼は文章に優れ、エマ・ゴールドマンの執筆についても助けるところが多かったと言われている。

ヒッポリート・ハーヴェル

彼については詳細が判らない。エマ・ゴールドマンは自伝の中で、彼と知合った状況を書いているが、それは大体1899年の英京ロンドン滞在中であった。この頃彼女は医学を勉強して博士号を取る積りで、またボア戦争を始めた英国で反戦運動に従事していた。ヒッポリートはチェコ人で、だが亡命中で彼女の集会へ出席し、そこで知友になった。彼女の評言、「ヒッポリート・ハーヴェルは本当の百科辞典でした。彼はヨーロッパ各地の運動に従事する人びととその活動を

ことごとく知っていました。」身体つきについて、「彼は背は低く、膚の色は黒かったが、大きな眼が蒼白の顔の中でひとときわ光っていました。」当時の彼は亡命者として生活が苦しく、寄宿舎付学校の雑用を受持っていた。だが仕事以外の彼はダンディであったと言う。エマは彼によってイーストエンドの貧民街を案内され、その窮状を詳しく見極めた。また彼に愛情を持ち、自由恋愛を実行している。ヒッポリートは神経質でエマを対人関係ではしばしば苦しめ、クロボトキンとの会見の際には議論となり、後程、彼はクロボトキンを評して「アナーキズム運動の法皇だ」と言った。クロボトキンは自説をまげない強力なエゴの持主と見受けられるふしがあった。ヒッポリートはエマとの交情が終っても生涯彼女の協力者として「大地」誌を中心に働いたようである。

☆ 訳者はこの冊子の文中に現われる日本人については註を省いた。幸徳秋水、堺利彦、加藤時次郎博士、詩人野口米次郎、片山潜の各氏に就いては、多分に読者の方が豊かな知識を持って居られる筈だし、研究書には事欠かないと思うからである。ご了承下さい。

以 上

リバタリアン双書

- 社会主義の下での人間の魂
オスカーワイルド著 ¥180 丁45
B6・70頁
- 政治の正義
W・ゴットウイン著 ¥400 B6・140頁
- 今日のアナーキズム
N・ウオーター著 ¥200 A5・37頁

◎バルカン社取扱い

- ☆ 月刊「リベルテール」 ¥50
- ☆ アナルコ・サンジカリズム
萩原晋太郎著 ¥250
- ☆ アナーキズム運動史年表
萩原晋太郎著 ¥250

「大地」誌に発表された 1971年1月10日発行
幸徳事件 訳者 はしもと・よしはる
発行所 バルカン社
東京都新宿区東大久保1-464
松喜ビル
電話 (354) 1039
振替 東京64906
定価 200円
丁45円

■表紙説明 上段左ヨリ 幸徳秋水，菅野スガ
下段左ヨリ A・ベルクマン，E・ゴールドマン